

地域資源の再評価と地域学に関する研究

-地域づくりのための「地域学」の構築-

研究員名 高橋 一男（国際学部国際地域学科 教授）

はじめに

少子高齢化、人口流出によって過疎化が進む今日の我が国において、関係省庁や多くの専門家、研究者が解決策を議論し、各地で多様な試みが行われている。そのような背景のもと、国の内外で地域づくりについて研究してきた成果から、地域資源の再評価の観点から「地域学」の構築と地域づくりの手法を考察することが本論考の目的である。

能登ゼミの10年をふりかえる

東洋大学国際学部国際地域学科の学生を主体とする「能登ゼミ」を2011年度から、国際地域学科独自の授業科目「SFS能登」を2014年度から続けている。2020年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響で現地に赴くことができなかったが、「SFS能登」では筆者がPCR検査を受け陰性であることを確認したうえでフィールドワーク実施地である石川県羽咋郡志賀町鶴野屋に出向き、当該地域の寺を教室に見立てて現地のインフォーマントの同席を得て、オンラインで授業を行った。

SFS能登を含めて東洋大学と能登との関わりは、2011年に石川県地域振興課の依頼を受けて「奥能登の交流人口拡大策」について国際地域学部（当時）の教員4人で取り組んだことがきっかけとなった。4日間の強行軍ではあったが奥能登で特色ある地域づくりに取り組んでいる人物、組織について調査を行った。その時に能登定住・交流機構の星野正光氏と出会い、夏季休暇を利用して東洋大生が奥能登でゼミ活動を行なわないかとのお誘いを受けて実現への運びとなった。参加学生は輪島市門前、志賀町、能登町、珠洲市の農家民宿等に泊まり込み、地域社会についてフィールド調査を行った。地域住民へのヒアリングや地場産業の日常作業に参加したうえで、お熊甲祭（おくまかぶとまつり）等へ参加する貴重な機会となった。これが現場主義に立脚した「能登ゼミ」の始まりとなった。

2015年には能登ゼミは更に発展して志賀町鶴野屋に隣接する東洋大学の「大学

の森」において里山保全活動を目的とする学生ボランティア活動「里山保全の会」が立ち上がり今日も続けている。

足かけ 10 年にわたる能登ゼミ活動から地域づくりに関する多くの知見を得てきた。能登ゼミの参加学生はこれまでに延べ 250 人以上になるが、2 年から 3 年間かけて能登と付き合い、卒業後も足を運ぶ学生も少なくない。地域の皆さんがいつでも快く受け入れてくれる背景には、このような細く長い付き合いがそこにあるからである。能登ゼミの最終日には学生による報告会を行い学生の学びの一端を披露させていただいている。学生は都市生活者として能登を見て、話を聞いて、考えたことを提起してきた。学生は能登の自然、自然からの豊かな恵み、そして人の温かみを何よりも評価している。裏返すと都市にはないものが能登にあるからこそそのような知見に至るのである。ヒアリングでどこにでも共通しているのは「ここは田舎だから何もない」との反応である。都市生活者である学生からすると、都市には簡単、便利、快適な生活があるけれども、能登には都市にはないかけがえのないものがたくさんあると捉えている。地域の人々にとっては「あたりまえ」のことが、学生には特別な価値のあるものに映って見えるのである。ここが本研究の地域資源の再評価という観点の始まりとなっている。

能登ゼミを経験し大学院で地域づくりを研究した学生が、2021 年 4 月に石川県加賀市の老舗温泉旅館に I ターン就職をする。この学生を含め能登ゼミ卒業生 5 名が石川県（珠洲市、輪島市、七尾市、加賀市）に I ターン就職をしている。

地域資源の再評価

5 名の卒業生が石川県に I ターン就職をしているのは、地域の人々にはあたりまえとしか見えていない資源が、実は都市生活者から見ると大変価値がある資源であることに気づいたからである。であるならばそれらを「地域資源」として捉え、外部から見ると高い価値があることを地域の人々が再認識するきっかけとすることができないか、地域づくりに役立てることができないか、I、U、J ターンに結びつく施策に発展させることができないかと考えるようになったのである。

そこで地域資源を定義するにあたり、地域を育み支えてきた資源として 5 つのカテゴリーを再評価の指標として設定している。

- ① ヒト（地域の担い手として長年従事、活躍している人材）
- ② モノ（地域で生産されるもの）
- ③ コト（地域が培ってきた文化、習慣、規範）
- ④ シゼン（地域を包括する自然環境、里山里海）
- ⑤ トキ（地域の歴史）

実際のところ地域づくりにはこの 5 つのカテゴリーの他にカネが必要であることは明らかであるが、地域資源を再評価し地域づくりに発展させるためには、関係住民の意識を変えるプロセスが重要になるので、地域づくりの前提としてこれら 5 つのカテゴリーを基軸におくことが肝要であると考えている。

地域資源の掘り起こしワークショップ

地域資源の再評価を通して地域づくりに発展させるためには、地域住民が地域資源の価値を認識し意識を変えていくプロセスが重要であると考え、住民参加型のワークショップから始めることが有効であると考え。

ここで地域資源の再評価を目的としたワークショップの事例を紹介する。筆者は 2020 年 9 月に金沢市内の大学において『観光文化・社会論』の集中講義を行い、参加学生に金沢(市)の地域資源を再評価する課題を与えワークショップを行った。参加学生を 6 つのグループに分けて地域資源の掘り起こしから始め、金沢(市)の交流人口、関係人口の拡大策について議論する講義であった。ワーキンググループから出された地域資源を取りまとめたものを表 1 として示す。

ワークショップでは 5 つのカテゴリー毎の吟味に加えてカテゴリーを跨いで関連する事項を議論することで地域資源の多様性が理解された。まずは学生自身が金沢に住んで生活してきたがこれだけの地域資源があったことに気づき、さらに地域資源が複合的に結びついて金沢の地域活性化に結びついてきたことを認識することになった。例えば、職人がいて彼らが地産の材料を使いつくりだす製品が産業をささえ長い歴史を育んできたことを知ることになったのである。

この事例が示すように、普段あたりまえと認識してきた地域資源は実は地域を支えてきた大事な資源であり「何もない」という認識とは正反対であることがわかる。地域資源を再評価することで関係住民が意識を変え、地域資源を積極的に評価することで、地域づくりが活性化する方向へ持って行けると確信を得た。

表 1 金沢に関する地域資源のカテゴリー分け事例

地域資源のカテゴリー	地域資源の内容
ヒト(地域の担い手として長年従事、活躍している人材)	鈴木大拙(禅文化を海外に広くしらしめた仏教学者)、八田與一(日本の水利技術者、台湾と日本の架け橋に)、三文豪(数々の作品を世に送り出す、ゆかりある場所に像や記念碑)、室生犀星(詩人)、泉鏡花(小説家)、徳田秋声(小説家)、金箔職人、金澤漆器職人、加賀友禅職人、浜辺美波(津幡町出身女優)、松井秀樹(根上町出身)、辻口博啓(七尾市出身)

	パティシエ)、西田幾多郎(哲学者)、松村謙一(金箔職人)、芋掘藤五郎(藤五郎が掘り出した山芋には砂金が付いていて、芋を洗った沢が「金洗いの沢」と呼ばれたことが、金沢という地名の由来)、ひやくまんさん(石川県の観光PRマスコットキャラクター)、前田利家、本田圭佑、谷本正憲(県知事)、山野之義(市長)、ツエーゲン金沢(サッカーチーム)、松本薫(柔道家)、川井梨紗子(レスリング選手)、中田ヤスタカ(音楽プロデューサー)、田中美里(女優)
モノ(地域で生産されるもの)	金箔(金沢が金箔生産の全国シェアのほぼ100%を占める)、21世紀美術館、近江町市場(金沢市民の台所)、茶屋街(にし茶屋街、ひがし茶屋街、主計町茶屋街)、加賀野菜(世界大戦以前から金沢で育てられている伝統的な野菜)、和菓子(茶道が盛んで消費量が多い)、あめの俵屋(古くからあるお菓子で白山の伏流水を使用)、加賀野菜、金沢おでん、金沢カレー(チャンピオンカレーが発祥)、8番らーめん、ハントライス、第七ギョーザ、かぶらずし、とり野菜みそ、治部煮、金沢漆器、金沢駅鼓門、氷室まんじゅう、丸谷焼、のどぐろ、大野醤油、きんつば、福うさぎ(金沢の銘菓)、寿司、液晶ディスプレイ(アイ・オー・データ)、割りばし(中本製箸)
コト(地域が培ってきた文化、習慣、規範)	百万石祭り(前田利家が金沢城に入城したことにちなんだもので、入場の行列を再現した祭り)、茶道、能(前田利家が能の愛好家だった)、金沢マラソン、雪吊り(雪の重みで枝が折れないよう、ロープで三角状に囲み補強する)、用水路、灯籠流し、氷室(冬場に氷を保存し夏場に将軍に献上するための保存庫)、加賀蔦(前田家お抱えの火消し、現在は百万石祭りでの梯子を使った演目となっている)、かなざわ国際交流祭り、百万石音楽祭、方言、加賀料理、花嫁のれん(嫁入り道具としてのれんを送る風習がある)、「弁当忘れても傘忘れるな」(雨が多い、天候が変わりやすいため)、加賀友禅
シゼン(地域を包括する自然環境、里山里海)	雷(雷発生率が全国1位、冬に多発)、雨(他地域に比べ降水量が多い)、兼六園、卯辰山、川(犀川=男川、浅野川=女川と呼ばれている)、金沢の用水(民家の間を網目のように抜けていくのが特徴)、千里浜、雪、湯涌温泉(金沢温泉郷を代表する温泉、金沢港(鮮度を保つための流通システムも特徴)、医王山、海(雨量が多く、山と海が近いため、里山の豊富な栄養分を含んだ水が海へ流れるため美味しい海の幸が取れる。日本海固有水と言われる特異な海水で満たされる)、大乘寺丘陵公園、金沢南総合運動公園バラ園、森林公園、玉泉湖
トキ(地域の歴史)	金沢城、金箔、前田家(前田藩)、茶道、武家屋敷、茶屋街(国の重要伝統的建造物群保存地区に指定)、忍者寺(妙立寺。府の加賀討伐に備えて山城の役割を持つ寺院群の監視所。隠し扉や敵を討つための仕掛けがあることから忍者寺と呼ばれる。)、尾山神社、加賀一向一揆(加賀の守護を務める富樫家の内紛が発端の浄土真宗本願寺派による武装蜂起)、長町武家屋敷跡(藩政時代に武士たちが暮らしていた屋敷の跡)、能楽、鼠多門、野田山墓地、歴史博物館(石川赤レンガミュージアム)、大野からくり記念館

(出典：集中講義時に学生がカテゴリー分けした項目を筆者が取りまとめ作成)

地域学研修のすすめ

過疎化が深刻となりその背景として少子高齢化、人口流出がすすみ、限界集落のことばが現実となっている現在、集落をどうやって維持するか、集落をどのように終焉させるかという段階に入ってきていることも明らかである。

そんな現状を少しでも変えていくために多くの議論がなされ、施策が実践されている。いろいろなアプローチがあると思うが、人口の維持の観点からはI、U、Jターンをどのように誘致するかという課題が指摘できる。近年、田園回帰という言葉に代表されるように若者のIターンが徐々に増えている。しかしU、Jターンは伸び悩んでいるのが現状である。能登ゼミだけでなく国内の地方における地域づくりの調査を行っていて気づくのは、親世代、祖父母世代が子どもたちに「ここは田舎だから何もない」と口にして子育て、孫育てをしていてはU、Jターンは期待できないということである。若者が地域に対する夢を持つことができないのである。

一般論として進学、就職で都市に出ていくことは大いに歓迎である。しかし生まれ育った故郷がどんなに豊かな土地であるかということもきちんと刷り込んでおくことも必要である。外の世界を見ていつでも戻ってこいという姿勢が地域には必要ではないか。

そこで豊かな地域を認識するために地域資源を再評価するワークショップと議論の材料としてのテキスト「地域学」を構築することを提案したい。進学や就職を控えた高校生が地域学をきちんと学ぶ機会を高校の授業に地域学研修として組み込むことであろう。一方、親世代にも同様の地域学研修を実施し「田舎だから何もない」意識を変えるプログラムの構築が期待される。

地域学研修には当事者だけではなく外からの視点を指摘できる人材、地域のステークホルダー、さらに忘れてはならないのは地域資源としてのヒトがファシリテーターする役割を担わなければならない。

今後の課題

地域学構築の基底には、地域社会つまり地域に根ざした共同体の理解が必須である。共同体論は長い歴史を持ち、多くの研究者によって議論されてきたが、欧州の近代化論としての共同体論とは異なり、日本における共同体論を踏まえた地域学を構築する必要がある。また、この地域資源の再評価を通じた地域づくりと地域学の構築と実践は、日本の地方の活性化のみならず少なくとも日本的共同体論を共有できるアジアの国々における地域開発に貢献できるものと考えられる。

参考文献

石川県自治と教育研究会編、季刊『石川自治と教育』、石川県自治と教育研究会、2021年

内山節、『共同体の基礎理論-自然と人間の基層から-』、農山漁村文化協会、2010年
高橋一男、「地方へのUターン者確保に関する考察-東洋大生の能登ゼミ活動から見えてきたこと-」、『東洋大学地域活性化研究所報 No.17』、2020年

高橋一男、「地域資源を活かした地域づくりに関する研究-コミュニティ組織と行政の関係性に着目して-」、『東洋大学地域活性化研究所報 No.16』、2019年

高橋一男、「地域資源の再評価とネットワークによる地域活性化に関する考察」、『東洋大学地域活性化研究所報 No.15』、2018年

高橋一男、「地域資源の再評価と地域の活性化」、『東洋大学地域活性化研究所報 No.14』、2017年

経塚幸夫編、『地産地消文化情報誌 能登』、2010年

宮口侗迪、『過疎に打ち克つ-先進的な少数社会をめざして-』、原書房、2020年